

## 立羽不角論序説：貞門の俳諧師としての不角

平島，順子  
九州大学大学院修士課程平成7年修了

<https://doi.org/10.15017/9422>

---

出版情報：語文研究. 80, pp.35-50, 1995-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

たちば  
立羽不角論序説

——貞門の俳諧師としての不角——

平 島 順 子

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「不角」の項をみると「俳人・雑俳点者」という分類がなされている。これは同辞典において調和、淡々といった人々が単に「俳人」という分類しかされていないことと考え合わせると、不角には「俳人」に加えて「雑俳点者」という概念が付与されているのであることを知る。本稿は、従来「雑俳点者」という認識をされてきた不角を、貞門の俳諧師としてとらえ直すことを目標とするものである。

一 前句付について

「雑俳」とは「雑体の俳諧の義で、俳諧の亜流に属する『前句付』をはじめ、そこから更に派生した『筥付』以下の多種多様の通俗文芸の総称である」が、「その範囲は必ずしも明確ではない」（宮田正信氏「雑俳」の項。『俳諧大辞典』明治書院 昭和三十三年七月）とされている。『国書総目録』（岩波書店）所載の不角の撰集を閲すると『二葉の松』『若みとり』『千代見草』『一息』『二息』『へらず口』『昼礫』『矢の根鍛冶前集』『矢の根鍛冶後集』『俳諧双子山』『俳諧

広原海』、『瀬どり船』『水馴棹』といった月並前句付高点集が「雑俳」という分類をされているので、不角が「雑俳点者」とされるのは前句付の点をしたためであることがわかる。現在、前句付の点をするということは、連句の点することに比べて何か一段低い営みであるといった認識がなされている感がある。しかし、前句に付句を付けることは早く宗鑑編『犬筑波集』において行われたことであり、貞徳も『天水抄』（寛永二十一年）において一つの前句に多くの付句を付けることを試みる等、前句付自体は「史的に見れば、連歌・俳諧の基本単位であり、さらに原初連歌そのもので、連歌・俳諧ともその付合練習として行われて来た」（鈴木勝忠氏「前句付」の項。『日本古典文学大辞典第五巻』岩波書店 昭和五十九年十月）ものであった。従ってその点をするということは連句の点をするのと同様、何ら低くみなされるべきことではない。不角が出版した月並前句付高点集で現存するのは、『二葉の松』（元禄三年）、『若みとり』（元禄四年）、『千代見草』（元禄五年）、『一息』『二息』（元禄六年）、『へらず口』『誹諧うたゝね』（元禄七年）、『昼礫』（元禄八年）、『矢の根鍛冶前集』『矢の根鍛冶後集』（元禄九年）、『誹諧双子山前集』

(元禄十年)、『俳諧広原海』(元禄十一年)、『元禄十四年』、『俳諧せとりふね』(元禄十五年)、『宝永元年』、『水馴櫓』(宝永元年)、『宝永二年』、『俳諧一騎討』(宝永三年)、『一騎討後集』(宝永四年)の十六作品(書名は外題による)である。このうち『二葉の松』『矢の根鍬治後集』『一騎討後集』は完本が現存しないため不明であるが、他の十三作品は全て高点を取った前句付作品ではなく、不角の独吟又は他の俳人との連吟という形で連句を付載しており、連句と前句付とが俳諧における二本の柱であるということの不角が認識していたことがうかがえる本の作りとなっている。書名に「俳諧」を冠したものが多くことも注目されよう。荻野清氏は「俳人岸本調和の一生」(『国語・国文』第五巻第四号 星野書店 昭和十年四月)、「岸本調和の一生」として『俳文学叢説』赤尾照文堂 昭和四十六年四月に再録)において、調和が「上梓した諸高点前句集は、所謂雑俳書と体裁を異にし、一般俳書と同様半紙本の様式を保つてゐた」と等より「前句付は、調和の場合、全く俳諧と一連鎖の上に眺められ、殆どこれと同様の重要さを以て遇せられてゐた」とされたが、先に挙げた現存する不角の前句付高点集十六作品の書型は全て半紙本であり、調和と行動を共にすることが多かった不角もまた調和と同じであったのである。不角が行った「雑俳点者」といわれる活動は前句付の点をしたことであるが、前句付は「点者の数もおびただしく、芭蕉ら一派の少数者を除いては、当代の俳諧師で多少ともこれに関係しないものはなかった」(宮田正信氏「前句付」の項、『俳諧大辞典』前出)といわれ、不角の師である不卜も前句付の点をしているが、しかしそれは俳諧師としては当然の営為であったのである、むしろ前句付の点をしなかった人々の方にこそ、その特異性

を見出すべきである。俳諧師を遊女にみたてて評判した轍士著「花見車」(井筒屋庄兵衛版、元禄十五年刊)「江戸」の部において不角は最高位の太夫の位におかれているが、その著作を示す欄には「前句づけの本数〳〵」と記されている。元禄十五年の時点では「前句づけの本」は、評判記において最高位におかれた俳諧師が出版しているものとして挙げられても何ら不自然なものではなかったことが知られる。当時においては「前句付も俳諧の一体」(鈴木勝忠氏「前句付・雑俳——連俳史の底流——」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 昭和六十二年五月)。「前句付と雑俳」として『近世俳諧史の基層』名古屋大学出版会 平成四年十二月に再録)であると考えられているのである。

また、安田吉人氏は「不角前句付考」(『成城国文学』昭和六十三年四月)において「寒い事かな〳〵」「勝気なりけり〳〵」(若みどり)、「にくい事哉憎事かな」「後生ねかひや〳〵」「出たい事かな〳〵」「情ない事〳〵」(『千代見草』)という不角編前句付高点集に出題された六句の前句を挙げ、次のように述べられた。

たびたび提示されたこれらの前句題は、句自体に付句を拘束する意味内容を持たない、いわゆる正躰なき前句の一種である。  
『新增犬筑波集』で「正躰なし」と貞徳が否定的な評価をくだして以来ほとんど使われることのなかった正躰なき前句は、こうして元禄中期に不角前句付で復活するやいなや、たちまち主流となって川柳にまで続いてゆく。

鈴木勝忠氏は「貞徳に『正体なし』と否定された量語題」(前句付

について『川柳・狂歌』角川鑑賞古典文学三十一 昭和五十二年十一月。「前句付とその変遷」として『近世俳諧史の基層』前出に再録）とされ、安田氏の論も不角が出题した疊語題の前句を正体なき句とされた上での論である。しかし、貞徳が「正体なし」として難じたのは本当に「疊語題」だったのであろうか。

『新增犬筑波集』の「淀川」は、宗鑑編『犬筑波集』の付合を掲げて貞徳がそれに評を加え、さらに自ら第三を付けてその付け方を自解したものであるが、「淀川」において貞徳が「正体なし」と評したのは次の二句である。貞徳の評とともにあげる。(引用は中村俊定氏・森川昭氏校注『古典俳文学大系一 貞門俳諧集一』集英社 昭和四十五年十一月による)

うへにかた／＼下にかた／＼

此前句一句の正躰なし 作りものなり

……①

内はあかくてそとはまつくろ

此句無正躰 作物なるべし

……②

いずれも「正躰なし」という評とともに「作り物」という評がなされているので、「作り物」あるいはそれに類する評をなされているものをも次あげる。

吹もふかれずするもすられず

此句一句の儀なし 作物也 今はかやうの前句をば不用也

……③

入度もあり入度もなし

是前句つくり事なるべし そのかみ七句付の前句に「みえつかくれつ／＼」とあるを一句の正躰きこへざるよし人々申せしを蕨公の曰「是は恋句なるべし 不苦」とて各付らる。されば前句にも一句の理きこへぬをば當時は誹諧なり共可引用捨

……④

仏も物をおひたまふ也

さかの尺廻しやくせむだんと聞からに

此前句は作たるとみえたり 又聞からにとは歌の上の句のやうにてとまりがたし

……⑤

③④の評にある「一句の儀なし」「一句の理きこへぬ」とは同じ意味であると思われる「一句の理なし」という評をもつものとしては、付句ではあるが次の句がある。

今日もくれぬと帰る番匠

山寺の入相のかねをこしにさし

むかしはいかにて一句の理なし 今は不用

……⑥

右にあげた句に共通するのは「疊語題」であることではなく、句の内容が不自然であるということである。①②③④の句は、「うへ」「下」「内はあかく」「そとはまつくろ」「吹く」「ふかれず」「する」「すられず」「入度もあり」「入度もなし」というように、一句の中に相反する概念が同居していることが不自然な「作り物」なのであり、「一句の理」が「きこへ」ない「正躰」無き句であるというので

あると思われ<sup>(注6)</sup>。また⑤の句は「仏」が「物をおひたまふ」ということが自然ではない、殊更に「作りたる」ことに感じられるというのであり、⑥の句は「鉄」と「鐘」との掛詞ではあるが、こしにさすことはできないはずの「山寺の入相のかね」を「こしにさし」とするところが道理にかなわず「一句の理なし」と評されるゆえんであるといえよう。よく引かれる④の評語は一見覺語題の否定のように見える。しかし、この評が「入度のあり入度もなし」という前句に対してなされたものであることを考えると、覺語であることが問題であったのではなく、「見えつかくれつ〜」という前句が「入度もあり入度もなし」の句と同様に「見えつ」「かくれつ」という相反する概念を一句の中にはらんでいることが不自然なのであり、「一句の正躰」がきこえないということになるので「当時は誹諧なり共可<sup>レ</sup>用捨」ことであると考えるべきであろう。『新增大筑波集』において貞徳が「正体なし」として難じたのは「置語題」であったとはいえないのである。

『新增大筑波集』の刊行より一年後の寛永二十一年に成った『天水抄』(引用は小高敏郎氏校注『古典俳文学大系一 貞門俳諧集二』集英社 昭和四十六年三月による)において貞徳は

そのかみ幽斎法印御暮あそばされし時、何となく仰<sup>おほせ</sup>られし御詞を前句にして、当座に百六十句付侍し。其時と有し物をかくのたまひし物をなごおもひ出て、昔恋しく覺<sup>おぼ</sup>えければ、今又付て心をなごさめ侍る。もとせし句は皆忘れにけり。定<sup>あた</sup>て同じやうなる事なるべし。

として、以下幽斎の「まづはきれたり先はきれたり」という前句に二百三十五通りの付句を試みている。『天水抄』は秘伝書として写本でのみ伝わるものであるが、天理図書館綿屋文庫には上巻の貞徳の「寛永廿一年孟冬日 長頭磨<sup>一</sup>」という識語のところに

不角云、是歳長頭翁、実に十一歳なるにあらず。七十四才也。ゆるし色の句の脇下に、子細有て十一年以前此世に生れ侍と有にて考ふへし。承應二年没し給ふ時八十三。

という書き入れがあり、巻末に「不角」の印を押す不角自筆の写本(わ十三十一九)が現存するので、不角は『天水抄』をみていたことがわかる。書き入れの内容は、識語には「長頭磨<sup>一</sup>」(長頭磨は貞徳の別号)とあるが、寛永二十一年には貞徳は実際には七十四歳であり、『天水抄』上巻の「冬ちらぬ紅葉や風がゆるし色」の句の脇書に

丸子細有て、十一年以前より此世に生れ侍る。隔生即忘とて生を隔つれば前身を忘る事、凡夫の習ぞと仏のたまひしは是らの事にや。前生の父不断被<sup>まう</sup>申しは、「発句しては必<sup>かならず</sup>最負の人々に能<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>せ合<sup>あ</sup>すべき事也」と有しを、今思ひ当り侍る。若衆心得の為に爰にこれを記す。

とあることより考えよというものである。貞徳は寛永十年に命期が過ぎたとして翌年からあらたに一歳と数えはじめるのであるが、不角はそのことを理解していたことが知られる。門人二南斎智角の編

による不角の一周忌追善の集である『はい諧水いらす』(天理図書館綿屋文庫蔵本による。なお岩瀬文庫蔵「不角追慕集」は同じ書である)において智角の息柳芳堂森角から「貞徳翁四世の老人」と呼ばれているように、不角は、貞徳——未得——不卜——不角(沾涼編享保十七年『綾錦』、生川春明編天保九年『誹家大系図』による。智角編寛保三年『或問』によれば貞徳——玄札——未得——不卜——不角。『或問』は鈴木勝忠氏編『翻刻俳諧伝書集私家版』平成六年三月による)と続く、江戸における貞門の直系をうけつぐ俳諧師である。俳祖である貞徳が何の非難をすることもなく付句を二百三十五通りもつけてみせた覺語題の前句は、不角にとつては「正体なき前句」というようなものでは当然なく、自身が前句題として出題しても何の問題もないものであった。

## 二 正風と洒落風

不角には「南々舎正風齋」(『江戸菅笠』序)という号がある。そして『正風集』という題の書を出版し、元文元年には「正風後集」という柱刻をもち、序題に「正風江戸菅笠」と記される『江戸菅笠』を出版する。「正風」については『統清鮑』(延享二年刊)自序に次のように述べている。(引用は東京大学酒竹文庫蔵本により、私に句読点を付す。句読点に関しては以下の引用文も同)

濱の真砂はよみ尽すとも言の葉の絶る事なし。ゆく水更にもとの水にあらず。つとめて至れや、後世に止まる物ハ和哥に過たるハなし。貫之もいへり。学候はなんそ上手より名人にもなら

さらんや。先此道に入んと思は、俳学を厚うして階を登れへし。疎<sup>ソコカ</sup>にては浮雲流水のごとし。老子も深<sup>コソク</sup>根<sup>ネ</sup>固<sup>コ</sup>帯<sup>オビ</sup>よと云り。是又万代不易の正風を貴とする所謂也。哀唯世以<sup>レ</sup>正風なれかしと願のミ也。然れ共予か力にハ及す、以<sup>レ</sup>掌<sup>テ</sup>塞<sup>ム</sup>水<sup>ノ</sup>似たり。精衛<sup>セイウ</sup>か以<sup>レ</sup>貝<sup>ヲ</sup>海<sup>ヲ</sup>溲<sup>ル</sup>干<sup>ス</sup>とや。夢中<sup>ムチュウ</sup>蟲<sup>ムシ</sup>ハ不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>辛<sup>シ</sup>、蟬<sup>セミ</sup>蛆<sup>ウズ</sup>ハ不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>臭<sup>ニ</sup>、と人の嘲もあらん。思へらく他の誹は時<sup>ト</sup>く、易れ共正風の易<sup>カ</sup>事<sup>ノ</sup>のなきをよしとす。ひとへに我好む処の風義許を貴しとするは得<sup>レ</sup>魚<sup>ヲ</sup>忘<sup>ル</sup>筈<sup>ヲ</sup>得<sup>レ</sup>兎<sup>ヲ</sup>忘<sup>ル</sup>蹄<sup>ヲ</sup>とや笑はん。然れ共予か一念を笑ひるかへさんや。詩經<sup>シキョウ</sup>周<sup>シュウ</sup>南<sup>ナン</sup>商<sup>ショウ</sup>南<sup>ナン</sup>を正風才<sup>ノ</sup>一<sup>ト</sup>す。右<sup>ミドリ</sup>両<sup>リョウ</sup>南<sup>ナン</sup>縮<sup>チヂム</sup>て予か舍<sup>テ</sup>号<sup>ヲ</sup>と成<sup>ル</sup>。凡<sup>ソ</sup>正風の名目詩哥ともに離<sup>ル</sup>る事有<sup>ル</sup>へからず。予十三歳のとき一柳軒不卜に見<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ヲ</sup>ハ表徳遠山、是より不角と改<sup>ム</sup>。牙有<sup>ル</sup>物は無<sup>レ</sup>角<sup>ヲ</sup>改<sup>ム</sup>。それより七十余年此風義を不<sup>レ</sup>棄<sup>ス</sup>、表徳<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>改<sup>ム</sup>。

右の文中で「思へらく他の誹は時<sup>ト</sup>く、易れ共正風の易<sup>カ</sup>事<sup>ノ</sup>のなきをよしとす。ひとへに我好む処の風義許を貴しとするは得<sup>レ</sup>魚<sup>ヲ</sup>忘<sup>ル</sup>筈<sup>ヲ</sup>得<sup>レ</sup>兎<sup>ヲ</sup>忘<sup>ル</sup>蹄<sup>ヲ</sup>とや笑はん。然れ共予か一念を笑ひるかへさんや」とした上で「予十三歳のとき一柳軒不卜に見<sup>ル</sup>」(それより七十余年此風義を不棄)と述べていることより、不角が「好む処の風義」とは、十三歳の時についた師である不卜の「風義」すなわち貞門の俳諧であることがわかる。不角編不卜三十三回忌追善集『師恩集』(享保八年。京都大学頼原文庫蔵本による)自序において「我又師の正風を捨す」といい、不角編『米の守』(寛延元年。国立国会図書館蔵本による)自序においては「忘師の不卜、うどん気の詞花言葉の道を傳えられ其教へを捨す。正風の跡を踏む」という言い方をしているの

で「風義」と「正風」とがほぼ同じ意味で使われていることがわかり、不角における「正風」とは貞門の俳諧を指すものであることがわかる。紀行文『笠の蠅』（元禄十四年）では安應院に参詣した折、不角は次のように記している。（引用は国立国会図書館蔵本による）

安應院にまふてぬ。此寺に未塚か墓あり。是また俳師として我もその支流なれば手向にもと

夏蔦がまとひ残しぬ。ネ

不角

未塚は未得の息であり、先に述べたように不角は貞徳——未得——不卜——不角とつづく俳諧師である。不角は自身が貞門であること認識していたのである。『俳諧人名辞典』（高木蒼梧著 明治書院 昭和三十五年六月）「不角」の項の『正風集』の解説では「かれの言う正風は点取りの雑俳を指すものらしい」とするが、従うことはできない。

また、不角編『正風集』自序には次のようにある。（引用は天理図書館綿屋文庫蔵本による）

適訪来る人二人三人、世上の俳諧の沙汰をとりくみに言。一人の曰、今俳諧正風躰、しやれ風と分れて、正風躰をけちやうと号す。けちやうといふハ何を以て云や。答、しやれ風の俳諧ハ先達のおきてを用す、新々乾々如金。正風躰ハ慶長金のことくと也。尚可訕心より慶のイを略てけちやうとす。予曰、かた／＼の物語にてけちやうの謂始て知り、案するに此異名未繁昌すへき先表なり。今正に一句せは二句にむかふへきものといへ

ハ、人々大笑。又曰、正風躰の中にも先生を目に懸て訕。何そ訕りかへささるや。まき、委ハ旅僧問答に書かことく訕。人ハ名人なり。訕らるゝ我ハ下手也。呵起、蠅蜂、奮迅、成、電、いへとも、予曾て蠅蜂程の力量なし。

『正風集』の刊年は不明であるが、享保三、四年頃と推定される（注10）。従って享保三、四年頃には江戸の俳壇は不角の信奉する「正風躰」と「しやれ風」とにわかれており、「正風躰」が「けちやう」と非難の意を込めて呼ばれ、中でも特に不角が非難を受けていたことがわかる。

「正風」と「洒落風」の論争としては風雲子編『つげの枕』（宝永四年）が洒落風を攻撃したのに対して、季吟の門人であり本来は同じく貞門であった浮生が同年すぐに『滑稽弁惑原俳論』を著して洒落風擁護をかって出て洒落風側へ転向した争いが知られている。

（頼原退蔵氏「統俳諧論戦史」『俳諧史論考』星野書店 昭和十一年六月。『頼原退蔵著作集第四巻』中央公論社 昭和五十五年三月に再録）『つげの枕』に参加しているのは編者風雲子ほか子英・径菊・調和・周竹・一徳・白鳳・志交・一蜂であり、不角の名前はみえないが、当時から序文は不角が書いたものであるとの風評があった。現在には『つげの枕』の編者風雲子は不角の匿名と考えられている（鈴木勝忠氏「貞享元禄の江戸俳諧」『近世文芸』第二号 日本近世文学会 昭和三十年十月。白石悌三氏「つげのまくら」の項。『日本古典文学大辞典第四巻』岩波書店 昭和五十九年七月）が、不角自身は『正風集』自序において『つげの枕』の序文は自分が書いたものではないこと、実際には加わらなかったものの『つげの枕』の仲間に

加わるように誘われたこと、及び書肆を営んでいたことより『つげの枕』の出版はひきうけたことを述べている。<sup>(注1)</sup> 実際に序文を書いたか否かは別としても仲間に加わるよう誘われており、『つげの枕』に名前のみえる連衆は『つげの枕』の出版以後も不角と親しく交流がある俳人達であるので、『つげの花』に名前のみえる俳人と不角とが俳諧に対する考えを同じくするものであったことはひとめでよいであろう。『つげの枕』『滑稽弁惑原俳論』の論争から十三年後の享保五年には、今度は洒落風側からの不角個人に対する論難書である玉淵堂蟻龍著『俳諧とんと』が出版される。<sup>(注2)</sup> 洒落風が正風(貞門)を攻撃した論難書で出版されたものとして現在知られるのは、この『滑稽弁惑原俳論』と『俳諧とんと』の二書のみであるが、ここで注目されるのはこの二書がともに岡西惟中の言説によっていることである。『滑稽弁惑原俳論』はその論旨を惟中著『俳諧蒙求』(延宝三年)によっており(白石悌三氏「滑稽弁惑原俳論」の項。『日本古典文学大辞典第二巻』岩波書店 昭和五十九年一月)、又『俳諧とんと』はその前半部の記述のほとんどを脩竹堂著『俳諧或問』(延宝六年)によっているが、脩竹堂は惟中の匿名かといわれており、『俳諧或問』の内容は惟中の見解と口吻にほとんど等しいものである(頼原退蔵氏「俳諧論戦史」『俳諧史の研究』星野書店 昭和八年五月。『頼原退蔵著作集第四巻』前出に再録。米谷巖氏「俳諧或問」の項。『日本古典文学大辞典第五巻』前出)。「洒落風」が「正風」を攻撃した、現存する二書の出版された論難書は、ともにかつて上方で談林の論客として貞門を攻撃した惟中の言説によっているのである。鈴木勝忠氏は『つげの枕』と『滑稽弁惑原俳論』の争いを「貞門対談林の論争延長として理解するのが、その性格の上では最も妥当な

ようである」(『未刊江戸座俳論集と研究』未刊国文資料刊行会 昭和三十四年一月)とされ、『つげの枕』の連衆を「前句付派貞門俳人」、洒落風である沾徳を「談林系沾徳」(「享保俳諧の展開」『俳諧史要』明治書院 昭和四十八年十一月)と呼ばれた。鬼貫が「ひとりこと」(享保三年刊)において

当時もてはやす俳諧の中に、此句を聞給へと語り侍るを、前句は何といふにやと問ふ人あれば、今時前句をたづね給ふは扱も古めかしく侍る、当風は前句なんどにかゝはる事候はずといふ人などもありげに聞ゆ。にがにがしくこそ侍れ。いにしへ談林風・伊丹風などいひて句にさまざま異形をつくせし時節も、更に前句を忘るゝ事なく、或は文字をけうとくあましたる句もあれど二句隔る掟を守らずといふ事なかりし。

と述べているように談林風と「当時もてはやす」洒落風とは親句と疎句の違いのあるものであり(白石悌三氏「元禄しゃれ風の説」創立三十年福岡大学記念論文集文理編』昭和三十九年十一月)同じものではなかったが、その対する相手は貞門であるという点では両者は同じ性質を有するものであった。不角は江戸における貞門の直系を受けつぐ俳諧師であるが、それは敵対する関係にあった洒落風の側でも認めていた、当時としてはいわば当たり前の認識だったのである。



### 三 蕉門とのかかわり

不角編紀行文『木曾の麻衣』（享保十五年。引用は国立国会図書館蔵本による）六巻の粟津が原のところには次のような箇所がある。

俳諧数寄る人、芭蕉翁の手向と見えて寺の障子に明間もなく発句を張付たり。予もいにしへの馴染あれば

玉巻も哀魂巻芭蕉かな

石碑に手向て

先月を得也清水一檜杓

正風の味ひは今もかはらず

涼しさよ同じ味有る手向水

不角

壽角

辰角

また不角編『江戸菅笠』（元文元年。引用は国立国会図書館蔵明和二年再版本による。『国書総目録』によると『江戸菅笠』は現存するのは国立国会図書館蔵本のみである。なお『国書総目録』は明和八年再版とするが、明和二年の誤である）自序には次のようにある。

芭蕉或會に出て、十句言を二句して止ミぬ。人是を問。答て、悪<sup>+</sup>句を数鳴せんは詮なし。懐紙のあらん限りは恥しき事也と。

後世にとままる物は和哥に過たるへなしと貫之も書り。今しやれを轉んして正風、芭蕉風とて和らかにしたつる風義専<sup>+</sup>也。先以天元ノ一にかへりて可也。今の芭蕉風といへる句を考するに古池やのはせをか句の趣の一図と聞ゆる也。芭蕉は千變万化に

てかたよらず。予も若年の時席につらなりしに

きやら焼しめて身をたしむ也

討死の日とて胃も着さりけり

と付て自讃也。いか様付肌、一句の働<sup>+</sup>今も面白し。又発句に

景清も花見の時七兵衛

としられたり。是等の句にて味ひしるへし。唯けしき一種のミに限るへからず。 (傍線平島)

右の例より芭蕉と不角とは面識があったことが知られる。なお右の『木曾の麻衣』の記述について頼原退蔵氏は「享保俳諧の三中心」（『俳諧史論考』前出）において「芭蕉の塚に詣でて『正風の味ひは今もかはらず』と、芭蕉と風を同じくするやうな事を言ったりして居る。しかしそれは結局名目だけの論にすぎなかつた」として「要するに不角の正風は、其角・沾徳一派に対抗する為に唱へた名目にすぎず、決して芭蕉の風に近づかうとする類のものではなかつた」とされる。不角における「正風」は先に述べたように貞門を指すものであるが、芭蕉は周知のように季吟の弟子であり、江戸に出てからは不角の師である不卜と親しくしている。従つて不角の息辰角が芭蕉のことを自分たちと同じ貞門の俳諧師であると考えて「正風」といったとしても、それは何ら不思議のないことであつたといえる。また『江戸菅笠』の記述は、不角の門人である二南斎智角著『或問』（寛保三年写。引用は鈴木勝忠氏『翻刻俳諧伝書集私家版』前出による）に

芭蕉と我師との巻の中に、

きやらたきしめて身を嗜む也

討死の日とて甲も着さりけり

此句を自賛せられしよし聞り。

芭蕉

とあることからわかるように、不角が詠んだ「きやら焼しめて身をたしむ也」という句に芭蕉が「討死の日とて胃も着さりけり」という句をつけて自讃したという意である。この付句は『校本芭蕉全集』（角川書店）には採録されていないのであるが、不角の師である不卜と芭蕉との関係を考えれば芭蕉と不角が一座するということはあるうることであり、芭蕉の付句として加えらるべき資料であると思われる。なお「景清も花見の時は七兵衛」は句形がやや異なるものの『翁草』等に収める元禄元年の芭蕉の発句である。その他、蕉門の俳人の中では桃隣、嵐雪と不角は親しい。以下、桃隣、嵐雪と不角との関係をみてみることにする。

(1) 桃隣と不角

「芭蕉ノ従弟」(支考編『本朝文鑑』享保三年刊)といわれる桃隣であるが、不角との交流を簡単に記すと次のごとくである。(松尾真知子氏「桃隣年譜稿(上)(下)」『大阪俳文学研究会会報』昭和六十二年九月、昭和六十三年十月をもとに作成)

元禄十年

。夏 花蝶立句以下調和・嵐雪・神叔・不角・桃隣・一蜂・秀和・和盈・九河・介我・里風・不貫・和推・躍亀・盤谷・哲精・素狄・記堂・湖月・執筆一座の百韻「声の果」の巻成る。(調和編「俳諧

面々硯」元禄十一年)

。八月 桃隣編芭蕉三回忌追善「陸奥衝」に不角の肖像画が載り、不角の発句四入集。

。八月十五日 岩翁亭での月見の会に不角と桃隣一座。他の連衆は松貢・調和・山夕・常陽・和英・岩泉・尺草・快易・松翁・艶子・其角・嵐雪・挙白・秀和・無倫・東潮・素狄・神叔・介我・子英・長雅・止水・青洋・木下・猊山・仙化・百里・虚谷・風調・仙鶴・浦水・立志。(艶子編「みづびらめ」元禄十一年刊)

元禄十五年

。一月 不角編『元禄十五年歳旦』に桃隣の発句一入集。

。四月 この頃不角立句以下答船・花伯・不水・左琴・桃翁(桃隣の別号)一座の歌仙「丹波路や」の巻成る。(不角編「俳諧一峠」元禄十六年)

。好角立句以下不角・桃隣・九角一座の歌仙「誰方に」の巻成る。(不角編「入間川やらすの雨」)

宝永三年

。七月十二日 桃隣月並会で不角、百韻に点評をほどこす。(天理図書館綿屋文庫蔵「統百五拾韻」)

宝永七年

。十月十二日 桃翁編芭蕉十七回忌追善『粟津原』に不角の発句一入集。

右の中で注目されるのは桃隣が編集した芭蕉の追善集である『陸奥衝』『粟津原』の二書の俳書に、不角が調和らとともに蕉門の俳人にまじって入集していることである。松尾真知子氏は「桃隣の俳諧活動——『陸奥衝』を中心として——」（『大阪俳文学研究会会報』平成三年十月）において、『陸奥衝』には「調和・不角等の前句付俳諧を行う点者集団の入集」等の「蕉門の俳書としてふさわしくない要素が認められ」るが、「桃隣が陸奥方面に旅立ったのは、調和や不角の勢力が及ぶ各地を行脚し、そこに『陸奥衝』なる俳書を刊行するための資金を求める目的があったからではなからうか」と、その理由を「経済的援助」に求める推定をされた。松尾氏は『陸奥衝』に「調和・不角等が入集していることを「蕉門の俳書としてふさわしくない」と考えておられるのだが、自身が編集した書であるのだから桃隣がそう考えていたとは思われない。俳諧師を遊女にみたてて評判した『花見車』（元禄十五年刊。前出）「江戸」の部において桃隣は最高位の「太夫」の位におかれているが、「太夫」の位におかれるほどの俳諧師がそれほど資金的に困っていたのかどうかも私には疑問である。『陸奥衝』より十三年後の宝永七年にも桃隣は芭蕉十七回忌の追善集である『粟津原』を編むが、この書にも露沾・秋色・園女らの俳人に混じって不角は調和らとともに入集している。鈴木勝忠氏は「宝永正徳の江戸俳諧」（『国語と国文学』至文堂 昭和二十九年十一月。『近世俳諧史の基層』前出に再録）において『粟津ヶ

原』には、師翁十七回と銘を打つに拘らず、その連中は、金獅・不角・青流・径菊・山夕・貞佐・調和・一峰・無倫・和英らであつて、地下の芭蕉も微笑を禁じ得なかつたと思われる」と述べておられる。桃隣が編んだ芭蕉の追善集で現存するのは『陸奥衝』『粟津原』の二書のみであるが、師であり血縁関係にもあつた芭蕉の追善集に桃隣はなぜ二度とも不角を入集させたのであろうか。『粟津原』巻末には桃隣自身が記した次のような系図がある。（引用は天理図書館綿屋文庫蔵本による）

他所の手向種諸国の門弟いとなみ祭りて

枯なから芭蕉に四百八十寺

桃翁

誹祖松永追遥軒長頭丸貞徳——北村拾穂軒再昌院法印季吟——

松尾釣月軒芭蕉翁桃青居士——天野呉竹軒太白堂桃翁——

印（天竺） 印（呉竹）

寛永七庚寅之十月十二日

芭蕉は季吟の弟子であるが、桃隣はそれを貞徳——季吟——芭蕉とつづく俳系としてとらえていたのである。不角は貞徳——未得——不卜——不角と続く「貞徳翁四世の老人」（智角編『はい諸水いらす』前出）であり、調和もまた貞門である。師である芭蕉の追善集を門弟の俳人の句だけではなく、「誹祖」である貞徳の流れを受けつぐ、江戸における現在の貞門の有力俳人である不角や調和らの句をもまじえた形で編集することにこそ桃隣は意義を見出していたといえるであらう。

(2) 嵐雪と不角

嵐雪と不角との交流を簡単に記すと次のごとくである。(石川真弘氏『蕉門俳人年譜集』前田書店 昭和五十七年一月をもとに作成)

元禄三年

。六月 嵐雪編『其袋』春之部に不角の発句一入集

元禄七年

。六月 不角編『蘆分船』夏の部に嵐雪と不角の両吟歌仙一卷入集。

元禄十年

。夏 花蝶立句以下調和・嵐雪・不角・桃隣ら一座の百韻一卷成る。(調和編『俳諧面々硯』元禄十一年。桃隣の項参照)

。八月十五日 岩翁亭での月見の会に不角と嵐雪一座。(艶子編『みづひらめ』元禄十一年刊。桃隣の項参照)

『蘆分船』所収の嵐雪と不角との両吟歌仙は次のようなものである。(翻刻は東京大学酒竹文庫蔵本による)

白雨や障子に懸たる片ひさし

嵐雪

蚊にうち曇る亭の焔火覆

不角

扇をく心風をや畳むらん

全

執筆まいれと菊のいろめき

嵐雪

山椒のわれから惜む昏の月

全

酒吞、自慢馬鹿のあつまり

不角

世に練て律儀に見ゆる中間宿

角

棺、遺る跡を抜する聲

雪

弟、の熱智恵煩熱と祝ふ也

角

何を笑ふそ門の味増搗

雪

来がりの客に鱸の盛足らす

角

地どりに指ふ角力とり衆

雪

月影に草刈棄る人切場

角

座顔の殖る貧国の秋

雪

聖堂を珠数にて拜む愚の願

角

まだ恋衣母がもの好

雪

尼姿とハ申されじ付過

角

胡蝶の速に下ル太鼓座

雪

法の師や湯巻庭の作り兒

全

精進腹は艶のなきかは

角

うらみの矢哀も返さず落車

雪

鷹も翳てハ鳥に詔ふ

角

異見きく間も居苦き夏座敷

雪

妾もて来ル水茶身に成

角

あひ初て後呉服屋に物かたり

雪

郭、生レハ氣のつまる恋

角

中さくる雷落かゝる近処

雪

咒詛に火鉢のしかも莞爾

角

寝言いふ口答して明々の月

雪

夜寒、集議にこぞる學寮

角

菊の香も残<sup>る</sup>葉の筥つゝ、

落字がち成葬の注文

雪 角

足もとを見て高はりし駕籠の者

全

菅笠しろく麦に隠るゝ

雪

親獅子か子獅子と遊ぶ花踊

全

儲異なる雛の客人

角

額原退蔵氏は不角と「嵐雪・桃隣等との俳交も、結局表面的の社交関係に終る外はなかつた」として右の歌仙のうちの「山椒のわれから惜む昏の月 嵐雪/酒呑み自慢馬鹿のあつまり 不角」「菊の香も残る葉の筥つゝみ 嵐雪/落字がち成葬の註文 不角/足もとを見て高はりし駕籠の者 同/菅笠しろく麦に隠るゝ 嵐雪」という付け合いを挙げ、「所詮二者は別々の途を歩むものであつた」とされた。不角と嵐雪の間に俳風の違いが存することは当然ではあるが、連句の付句というものが「つねに打越を突き放して前句から新たな推論を導かねばならない」（乾裕幸氏・白石梯三氏「連句への招待」有斐閣新書 昭和五十五年五月。平成元年六月和泉書院より重版）という性質を有しており、打越と前句とで作つた世界が閑寂なものであれば、前句と付句とで新たに作る世界はその逆にならざるをえないものであることを考えると、やや恣意的な抜き出し方であるように思われる。ここでは両者が交流をもっていたことにこそ注目すべきであろう。嵐雪と桃隣は行動をもとにして、近きことが多いので、近い考えをもっていたと推測される。現在知られる嵐雪の句の初見は、不角の師である不卜編『俳諧江戸広小路』（延宝六年）に入集するものである。嵐雪は「消極的退嬰的ともいえる温厚な性格」

であつたといわれ、不角、調和との交流に関しては「退嬰的性格の嵐雪にしては意外にさえ思われる動きであらう」、江戸において勢力を伸ばそうとする不角・調和らに一時期利用されたきらいがある（石川真弘氏「元禄後期の江戸蕉門の様相——享保俳諧史序章——」「橋茂先生古稀記念論文集」昭和五十五年十一月。『蕉風論考』和泉書院 平成二年三月に再録）といわれている。が、しかしこれはむしろ逆に嵐雪が「消極的退嬰的ともいえる温厚な性格」であつたからこそ、自身もその俳人としての初期に交流をもつた貞門の權威といつたものから精神的に自由になることができず、貞門の不角や調和とも交流をもつていたと考えた方がよいのではないだろうか。芭蕉は先人の功績は認めつつも強い信念のもとに点者生活をやめ、自身の俳諧を確立していった。嵐雪は点取俳諧に関係していらしく（石川真弘氏「嵐雪」の項。『日本古典文学大辞典第五卷』前出）、芭蕉の「新風に取り残された」（堀切実氏「芭蕉の門人」岩波新書 平成三十年十月）といわれているが、「消極的退嬰的ともいえる温厚な性格」、いかえれば保守的であつた彼にとつては貞門という俳諧における權威は疑うべくもないものであり、芭蕉が追及していく新風というものは彼には理解しがたい一面もあつたのではないだろうか。

俳諧を論じる場合、従来その俳風を中心に論じられることが多かったように思われる。俳諧が文学で以上それは当然のことではあるが、「芭蕉と近くなかつた」（鈴木勝忠氏「序章」『近世俳諧史の基層』前出）といわれる不角や調和が、蕉門の有力俳人である桃隣や嵐雪とも交流をもつていたことを考えると、俳風とともにまた俳系といったものも常に考える必要があるように思われる。

従来「雑俳点者」という認識がなされてきた不角であるが、江戸時代に不角のことを「雑俳点者」と呼んだ事例は見出せない。不角が出版した俳書の書型は全て一般的な俳書の書型である半紙本であり、雑俳書の書型であるとされる小本型や横小本型(注18)のものはない。不角が行った「雑俳」と呼ばれる活動は前句付の点をしたことであるが、当時においては前句付は俳諧の一体とみなされていた。また、不角は前句付の点ばかりをしていたわけではなく、他に高点発句集(『年々草』)「底なし瓢」(『足代』)「俳諧水車」(『俳諧草結』)「さるをかせ」(『発句集』)「風姿集」(『風姿亀鏡集』)「風姿三集」(『百人一句』)「百人一句後集」(『連句集』)「正風集」(『江戸菅笠』)「発句・連句集」(『蘆分船』)「俳諧粘飯篋」(『発句・連句・前句付の全てを備えた俳書』)「蘆纏輪」(『歳旦帳』)「俳諧作法書」(『清砲』)「統清砲」(『及び紀行文』)「笠の蠅」(『入間川やらずの雨』)「俳諧一峠」(『木曾の麻衣』)「有磯海」等をも出版している。前句付の点をしたからという理由で不角を「雑俳点者」と呼び、低くみなすことは改められなければならない。俳諧師を遊女にみたてて評判した「花見車」(前出)において不角は最高位の「太夫」の位に置かれている。元禄十六年には法橋に任じられ(不角編「俳諧一峠」)、享保十五年には「俳士に法眼とばかり書したるは、この人に限る」(竹内玄玄一著「俳家奇人談」文化十三年)といわれる法眼の位にまで登る(不角編「有磯海」)。その弟子のほとんどは武士階級であり、中には和歌を好み、飛鳥井雅章、中院通亮と親しく、狩野派の画をも学び、後園(後の後楽園)を造っ

たことで知られる風流大名備前岡山藩三十一万五千石の藩主池田綱政(俳号備角)や、岡山藩の支藩である備中鴨方藩二万五千石の藩主池田政倚(俳号菱角)といった人物もいた(頼原退蔵氏「不角雑考(上)」)「ひむろ」昭和十年五月。福井久蔵氏「諸大名の学術と文芸の研究」厚生閣 昭和十二年五月。琉球の中山王からは色紙を望まれてもいる(不角編「統清砲」序 延享二年。不角編「米の守」寛延元年)。これらのことは、当時においては不角が「雑俳点者」などとしてではなく、れっきとした「俳諧師」として存在していたこととの証となるであろう。「門下には顕貴豪富の士が多」かったことから「権貴に媚びた」(頼原退蔵氏「享保俳諧の三中心」前出)という言い方をされる不角であるが、「貞門俳人は、貞徳にしる、立圃にしる、皆それぞれ有力な背景を大名縉紳の間にもつてゐた」(岡田利兵衛氏「内藤風虎」)「国語と国文学」東京大学国語国文学会 昭和三十二年四月)のであり、時代は違ふとはいえ、同じく貞門の俳諧師であった不角にその非難は酷である。

上方においては貞門は延宝・天和期には談林におされて勢力を失っていくとされる(森川昭氏「貞門」の項。『日本古典文学大辞典 第四卷』岩波書店 昭和五十九年七月)。しかし、同時期江戸においては芭蕉・嵐雪と不角の師である不卜が親しく交流をもっていること、及び後には不角・調和らと対立する沾徳が調和の門人である調也門の俳人として出発すること等により、江戸においては延宝・天和期には未だ貞門が大きな力を有していたことがわかる。が、しかしそれも其角から沾徳へとうけつがれた洒落風にその勢力を奪われて行き、中には「滑稽弁惑原俳論」を著した浮生のように貞門から洒落風へ転向する者もでた。不角の長男不局(ふたけ)の歳旦帳は安永三年

(注20) 「養老の漣」まで確認できるものの、もはやそれは俳壇に影響力を与えうるものではなく、天保九年には生川春明編『誹家大系図』において「不角門士魏々トシテ群ヲ成ス。雖然後世二聞ヘタル人ナシ」と評される状態となっていた。江戸において貞門が次第に洒落風に勢力を奪われていく中で「化鳥風」と批難をされながらも、自身「正風」であると信じる貞門の側に立ち、門人三千人(不角編)にとふき車・享保十四年、智角編『はい諧水いらす』宝暦五年による。不局・寿角編『八十公』跋寛保元年、智角著「或問」寛保三年によれば四千人)を擁して江戸における貞門のいわば最後のかがやきともいえるべき存在であった俳諧師、それが立羽不角であったといえるであろう。

(注1) 『うたたね』『一騎討』『一騎討後集』の三作品は同じく月並前句付高点集であるが「俳諧」と分類されている。また柿衝文庫蔵『水鳥の巢』は百韻に不角が点をしたものであるが「雑俳」と分類されている。

(注2) 『水馴棹』巻四は「兎手拍」と題して、不角が出した発句に脇から表八句をつけさせ、それに不角が点をしたものであるが、「表に嫌ふへきを此八句にミゆるし」で付合練習の色彩が濃いのである。

(注3) 『一騎討』は中・下巻のみ現存し上巻未発見であるが、下巻に不曲・不角・露月の三吟歌仙が収められている。

(注4) 不角編不卜三十三回忘追善集『師恩集』(享保八年刊)序に「比はいつなるらん元禄四年かとの未四月九日、先生より人して近曾より脈心くるし。されはそ前句の點に憐る。来りて助給ひてんやと承る故、師命もたしかく内くの内かひやり捨て罷り申。附句の點三巻に及ふ時……」とある。引用は京都大学頼原文庫蔵本による。

(注5) 「江戸」の部の他の「太夫」は、調和、芭蕉、嵐雪、其角、一晶、沾

徳、立志、山夕、無倫、桃隣。

(注6) ただし、『新增犬筑波集』には他に「切たくもあり切たくもなし」<sup>①</sup>「居もいられず立もたれず」という二句の相反する概念を一句のうちにはらんでいる前句があるのであるが、貞徳はこの二句には何の評も付けていない。私には④の「入度もあり入度もなし」の句と③の「吹もふかれずするもすられず」の句とこの二句との間の違いがわからぬのであるが、貞徳はこの二句には問題を感じなかったのだからか。御教示を請いたい。

(注7) 小高敏郎氏『松永貞徳の研究統篇』(至文堂 昭和三十一年六月)において指摘。なお小高氏は不角の姓を「森井」とするが、現在不角の姓としては「立羽」以外には知られておらず、氏が何によったものか不明である。

(注8) 宝永七年発行の宝永小判および宝永一分金は裏面に「乾」字の極印が打たれていたところから「乾字金」又は「乾金」といったが、慶長金に比して純金の含有量が甚しく減じていたことをふまえての表現。

(注9) 不角編『尊鑑輪前集』(宝永四年)序「旅僧問答」に「予、未熟にして他の俳諧の風義を論せん事おこがましく、目なし針に糸を貫くかことし。他の智は貴ク予か智はいやし。唯他不論」とあるのをさす。引用は鈴木勝忠氏翻刻『未刊雑俳資料廿五期九』(昭和三十九年三月)による。

(注10) 『正風集』の刊年に関しては「新群書類從第七書目」に「享保十五年刊」とあり、『国書総目録』(岩波書店)でもこれを踏襲しているが、頼原退蔵氏が「不角追考」(『ひむろ』昭和十年十月)において指摘されたように、これは「全く誤か、もしくは再版本によったもの」と思われる。柱刻に「正風後集」とある不角編『江戸菅笠』(元文元年)の序文には「先年百哥仙を撰するに百三十哥仙に達したり。尚一集を編集せん」と催し待るに半過集時、十七年以前の回録に詠草も焦土に埋へ。此節、愚集七十五版も灰中にして失ぬ。それより年経て漸今二集充て百餘り哥仙集」とある。『正風集』には百二十九歌仙が収

められているため「百三十哥仙」というのは「正風集」を指すものと思われ、「十七年以前の回録」は逆算すると享保五年のこととなる（頼原氏前掲論文）。また米谷巖氏・浜森太郎氏が「近世俳書年表稿（一八）」（『近世文芸稿』広島近世文芸研究会 昭和五十四年十一月）において指摘されたように、不角に対する論難書である玉淵堂蟠龍著「俳諧とんと」（享保五年）の中には「正風集」が浮生没後の出版であるがみえる。従って「正風集」は享保一年一月（浮生没。沾涼編「綾錦」享保十七年、春明編「誹家大系図」天保九年による）から享保五年（火災、及び「俳諧とんと」の刊年）の間の刊行ということとなる。

〔注11〕「正風集」序に「他を誦事を嫌ひ給ふよし、是亦俳術の行跡なり。それ如何となれば、つけの枕の序ハ叟の書よし。つけの枕始、時予にも加るべきよし内意侍りし故、旁ハ他の俳諧をなじり給ふ思量あり、予に力なし。旁の上手並に罷出てもせんもおこかましくこそ侍れ、我ハゆるしてよとて彼集に入らず。彼序ハ一苧齋風子と有。曾て何物と云事をしらす。時に各、今迄ハ先生序を書りと自他共に思ひ。序書さる事をいかにして今迄は仰られずや。孔子ハ陽虎に似て膚と成、丘不言天命に隨て国を出す。天眼未問嶋を不顧、霜天に五異香をささ。四知の明らか成もの也。今序文書さる事、他の俳諧への言分してめたれ顔のふるまひにてハ全くなし。尻口にて言、鈍橋の働と旁いへる其断を述る迄也。其心底にて何条彼集を手前より弘めけるにや。我に子数多有。独は書生とす。たとへ他の俳書なりとも頼まは何そ板におこさ、らんや。他の俳書を板におこせハとて我他の俳諧に移るにもあらず。譬へハ書生に口運派あらんに三部經を版にして弘るかことし」とある。引用は大塚圖書館縮屋文庫蔵本による。拙稿「俳諧とんと」翻刻と解題——不角に対する論難書——」（『雅俗』第三号 雅俗の会 平成八年一月発行予定）。

〔注13〕荻野清氏・今榮蔵氏「芭蕉年譜」（校本芭蕉全集第九卷）角川書店 昭和四十二年五月）。

〔注14〕『翁草』芭蕉庵小文庫『陸奥衛』泊船集』蕉翁句集』は「花見の座には」。『泊船集書入』は「景清は花見の座にも」。『きれぐ』は「花見の座では」（阿部喜三男氏校注「校本芭蕉全集第一卷」角川書店 昭和三十七年五月による）。

〔注15〕『人間川やらざる雨』の刊年を頼原退蔵氏「不角難考（下）——不角年表——」（『ひむろ』昭和十年八月）は元禄十四年とし、松尾真知子氏「桃隣年譜稿（下）」（前出）は年次不詳とする。加藤定彦氏・外村展子氏編「関東俳諧叢書第十一巻武蔵・相模編①」（青裳堂書店 平成七年八月）は「序文中に「年一歳とあることなどから、桃隣十五年五月の成立と推定される（安田吉人氏示教）」とするが、私も安田氏の説に賛意を表するものである。今、氏の説の補強として他の根拠を示せば、書中不角に法橋（元禄十六年叙任）、法眼（享保十五年叙任）等の肩書きがつけられていないこと、及び挿絵に描かれる不角が月代姿であること（不角は元禄十六年剃髪）より考えると、考えられる午年は元禄三年か元禄十五年かのどちらかであるが、桃隣が芭蕉に從つて江戸に下るのは元禄四年のことであるので、不角・桃隣・九角一座の歌仙を含む『人間川やらざる雨』の刊年は元禄十五年の午年であると決定してよいと思われる。

〔注16〕芭蕉をこのようにとらえることは桃隣に特有のことではないらしく、祇徳も「俳諧句選」（享保二十年刊。引用は白石佛三氏校注「古典俳文学大系十一 享保俳諧集」集英社 昭和四十七年三月による）において「貞徳翁門人、立圃・重頼・西武・良徳・貞室・季吟、いづれも此人々今以て名ありといへども、野々口立圃は自己の門をかまへ、松江重頼は維舟と名をあらため晩年に至りては談林にくみしたり。西武「久流留」の功ありて、良徳に「天水」を賜ふ誉れあれども、その門人秀たるなし。尤、貞室へ花のもとを譲りたまふ。貞室また貞恕に譲るといへど、貞恕のはいかい何んぞ二師につゞかんや。おしきかな貞室の家。こゝに季吟の家には芭蕉いで、談林をしりぞけ正風を起し中興開祖正風の翁と称しける。こゝを以て貞徳・季吟・



芭蕉の三翁を誦諸三代の宗匠とあがめ奉る也」と述べている。

(注17) 石川真弘氏『蕉門俳人年譜集』(前出)、松尾真知子氏『桃隣年譜稿

(上)(下)』(前出)。

(注18) 宮田正信氏「雑俳」の項。『日本古典文学大辞典第三巻』岩波書店  
昭和五十九年四月。

(注19) 白石悌三氏「改稿沾徳年譜考証——元禄末年まで——」『雅俗』第二  
号 雅俗の会 平成七年一月。

(注20) 『古典籍総合目録第一巻』(岩波書店 平成二年二月)は書名を『安永  
三甲午年歳旦俳諧集』とするが、序文に「養老の瀧と号」とあるの  
で、書名は『養老の瀧』である。また同書は編集名を「不<sub>レ</sub>扁」とする  
が、正しくは「不<sub>レ</sub>扁」である。